

午前は、ステークホルダー会合があったため、公式な交渉は行われなかった。午後は環境、知的財産、金融サービス、原産地規則、物品市場アクセス、投資の分科会が行われた。現在も分科会は進行中である。物品市場アクセスはテキストの議論だけ。

ステークホルダー会合は、9時から12時まで行われたが、これまでと違う形式で行われた。9時から11時までは予め登録を受けた希望する団体が、1団体あたり7分のプレゼンテーションを行った。会場が二つに分かれ、一つの会場で知的財産に関するプレゼンテーションが行われ、こちらは、日本の団体の参加はなかった。もう一つが知財以外のテーマに関するもので、10団体が参加した。そのうち5団体が日本からで、日本消費者連盟、TPPって何？、TPPを考える国民会議、精糖工業会、日本の畜産ネットワークがプレゼンテーションを行った。

日本消費者連盟は、食の安全について中心的に話をし、現状より厳しい規制が必要との主張をしていた。TPPって何？は、ネット上の様々な情報を分析し、日本の国民の多くはTPPにネガティブな意識を持っているとの結論を主張していた。TPPを考える国民会議は、結論はTPPに反対ということだが、食の安全、ISDS、健康保険や農業などの分野でTPPには強い懸念があるという主張をしていた。精糖工業会は、南西の島々で採れるサトウキビがいかに地域の生活を支えているか、地域にとって重要なものなので、これを失うのは非常に厳しいという話を行った。日本の畜産ネットワークは、食の安全の観点から、多くの肉を輸入に頼るようになると、輸出国で病気が起こった場合に大変なことになるという観点も含めて、国内の畜産を大切にする必要があるということをも主張し、併せて衆参の農水委員会のTPPに関する決議を紹介していた。プレゼンテーションは質疑応答なしで行われた。マレーシアの時は、知的財産関係のプレゼンテーションがほとんどであったようだが、日本が交渉に参加したこともあり、物品関係のものもかなりあったというのが今回の特徴だと思う。

その後の11時から12時までは、オープンダイアログという今までにない形式で行われた。立食パーティで使用するようなテーブルが用意され、各国の首席交渉官がそれぞれのテーブルに立っており、自由に首席交渉官と意見交換ができるようになっていた。これは、ブルネイの首席交渉官によると、これまでの首席交渉官との意見交換で採られていた共同記者会見方式では、どんな質問に対しても答えられない、という返答が多く、しかも15分程度で終了していたことから、形式を設けずに自由に話してもらおうという趣旨で採られた形式であるとのことだった。複数の首席交渉官と話すことが可能となり、また、コーヒーや軽食もあり、首席交渉官と自由に話ができるのは、ステークホルダーにとって貴重な機会だったと思う。一番人気は鶴岡首席交渉官で、多くの人に囲まれていた。日本の農業関係団体や消費者関係の団体が鶴岡首席を囲んで色々な議論をしていた。外国からのステークホルダーにも、鶴岡首席交渉官は有名らしく、名刺交換などをしていった。マレーシアのステークホルダーに囲まれる場面もあり、日本とマレーシアの友好関係について語っていたようだ。日本の参加者に聞いたところ、アメリカやニュージーランドの首席交渉官とも直接対話できるなど、共同記者会見方式よりもじっくり話ができたとあり、喜んでいただ様子である。私からもこのような会合をアレンジしてくれたブルネイの首席交渉官にお礼を述べた。

明28日10:30からは、ナショナル・スタジアムで我々と日本のステークホルダーとの意見交換会を行う。昨日の説明会は政府から交渉の概要を説明するという情報提供が主目的だったが、明日は、各ステークホルダーから、彼らの得た情報やご意見を頂戴する場と考えている。交渉も大詰めだが、最終的なラウンドの状況は明後日の説明会でを行う。日本のステークホルダーたちは初めてステークホルダー会合に参加した。昨日の参加者に聞いたら、他国のステークホルダーの方々との横の連携がとれたことに加え、直接首席交渉官と話ができたのがよかったという意見であった。

(以上)